

八戸ブックセンター

柴崎友香 小説家

八戸ブックセンターには、2018年に「すばる」の書店特集の取材と、2020年の「アイオワ/八戸～作家が滞在するということ～」展のイベントで、二度うかがいました。

2018年のエッセイを読み返してみると、最初に一人で一般の訪問者として訪れた印象を「謎の多い場所」と書いています。すごく広いわけではない一フロアの中に様々な本とその本から広がる世界、本を読む時間の楽しみが詰め込まれたその場所は、確かにとても魅力的に謎めいていました。翌日案内していただいております話をうかがい、さらに「アイオワ/八戸」展で展示の準備とイベントに関わり、そしてブックセンターの外の八戸の街のあちこちを巡ったことによって、本にまつわる力によって、深く探求し、遠くまで連れて行ってもらえるような入口や部屋がいくつも用意されている場所だとわかりました。そして、本を手にとって読む人、本の話をする人たちが、さらに自由にその入口や部屋を広げていける可能性に満ちているのだと思います。

「アイオワ/八戸」展のときは、まず本の紙を作る製紙工場を見学し、今まで本を何冊も出してきたのに知らなかった本が生まれる最初のスケールの大きな工程を体感しました。飲み屋やブックバーでお客さんとしてもてなしながらお話しするというのも、今までにない経験で、本を読むときは一人ですが、読んだあとは人とやりとりしたり共有したりできるその楽しさを満喫させてもらいました。高校生のみなさんとお話しするのも新鮮な視点がありましたし、小学校の授業ではわたしや滝口さんの小説を五、六年生のみなさんにどうふうに読んでもらうか、意外な方法で驚きました。小説に対して発見があって、自分も教室の中の一人としていっしょに学ばせてもらいました。

一冊の本ができるまでと、できあがった一冊の本が本屋さんへ、そして誰かの元へ届くまで。そして、本を読むこと、本について話すことでつながっていく。「八戸ブックセンターは、「本のまち八戸」というネットワークのランドマーク的存在なのだなあ」、とやはり最初のエッセイに書いた言葉をもっと知りました。

そして、「アイオワ/八戸」展で想像したとおりに、滞在して考えたり作ったりするのにとてもいい場所だとますます思っています。別の機会に夏に久慈に行くために八戸駅から八戸線に乗ったのですが、車窓から眺めた海岸沿いの風景は冬とは違った美しさがあって、春、夏、秋、冬とそれぞれの季節の八戸を過ごすことができたら、これまでの短い滞在とはまた違った本のまちのつながりが見えてきそうです。もう少し長い時間、買い物をしたり、港に行ったりしながら、歩き回るまちの

感覚や距離感が、本を読み、本を書くことにどんなふうにかかわっていくか。八戸ブックセンターを拠点・ホームとして青森県内や周辺の他の土地に出かけてまた戻ってくる小旅行もよさそうです。

そうして八戸ブックセンターで本を読み、本を書いた人たち同士が会っていく光景を、想像しています。

柴崎友香 tomoka shibasaki

小説家

「アイオワ／八戸～作家が滞在すること～」
(2020)

1973年大阪府出身。1999年に短篇「レッド、イエロー、オレンジ、オレンジ、ブルー」が『文藝別冊 J文学をより楽しむためのブックチャートBEST200』に掲載されデビュー。2014年に『春の庭』で芥川賞を受賞。著書に『寝ても覚めても』(河出書房新社)、『公園へ行かないか?火曜日に』(新潮社)など。

